



大正初期の福生駅前通り

福生町は、扇状地の開けた河岸段丘の発達する地形上に展開する基地の町である。この土地の歴史は相当に古く、五千年の昔、つまり縄文文化の時代すでに人の住む場所であつた。古代にあつては、隣接の秋留台地上に居を構え附近一帯にその勢力を誇つた豪族の支配下に置かれたものと推される。

福生郷の地名の残るは、集落のその古きを伝えるところである。

中世に於ては多くの武士の土着するところであつて、小宮・滝山の城主の支配下にもあつた。現在、福生の地名の見える最古の資料は正長二年（一四二九）のものがある。また、太平記に見る石浜の合戦は日本国史上有名である。

近世に至つては、福生村、熊川村が独立村として存在し、天領・私領の入会地であつた。その代官は、雨宮、岡上、中川、今井、設楽、杉山、大岡、伊奈の各氏で、一方旗本は田沢、長塩氏で、これらの代官旗本によつて福生村、熊川村は幕末に至るまで治められたのである。

明治維新の廃藩置県によつてこれらの制度が改められ、蕪山県六番組に属し、明治五年には神奈川県十二区五番組となり、同十二年には西多摩郡役所の管轄するところとなつた。明治十七年に福生、熊川（現福生町）川崎、五ノ神、羽村（現羽村町）の五ヶ村をもつて川崎村連合戸長役場が置かれた。

明治二十二年町村制の施行とともに福生、熊川の両村をもつて組合役場を設けて事務の共同処理にあたり、それより五十有余年にわたつてこの状態が続けられた。この間に明治二十六年には神奈川県と東京府の境界変更があつて東京府の所管となり、昭和十五年十一月十日両村を合併して町制を施行し、福生町と改称して今日にいたつている。

この間明治三十七年十一月十九日に青梅線が開通し福生駅が設置され（大正十二年四月二十五日電化した。）大正十四年四月二十日五日市線が開通し熊川駅が設置された。また、昭和四年には八高線が開通したが町の経済にはあまり影響はなかつた。

昭和十四年にいたって町の北部一帯にある約二五〇ヘクタールの山林の中約二〇〇ヘクタールが陸軍航空審査部及び陸軍航空整備学校の敷地として接収され、日華事変から大太平洋戦争を経て軍都として大きな発展を遂げるにいたった。

終戦と同時に陸軍施設は全部米軍に接収され、米軍横田基地として再出発した。その後基地は約六〇ヘクタール追加接収され、町には米軍を対象としてのサービス業が急速に増大し、したがって商店街も急速にのび、いわゆる基地の町として特異な発展をとげた。

また、米軍家族用の家屋の建築も多くなりその数は約一五〇〇戸に達しいわゆるハウズブームともいわれている。

昭和二十四年六月には町の一部約四〇町歩の区割整理事業が完了し、字を変更し新しく牛浜、志茂、本町と名称を設けた。

こうした中にあつても基地の町よりの脱皮が真剣に考えられ、首都圏整備法による市街地開発区域の指定をうけ、都市計画を推進して近代都市としての形態を備え、上、下水道を完備して生活環境の向上をはかるなど町発展のための努力が続けられている。青梅線の復線化の実現も近く、五日市線の電化とともに都心への時間も短縮され、衛星都市として明日への発展が約束されている。

現在の福生駅前通りの盛況

